

氏 名	まき 牧 たけ 剛 し 史
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	教 博 第 38 号
学位授与の日付	平 成 16 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	教 育 学 研 究 科 臨 床 教 育 学 専 攻
学位論文題目	夢との＜かかわり＞についての臨床心理学的研究 ——自と他の双方向的運動——

論文調査委員 (主 査) 助教授 河 合 俊 雄 教 授 山 中 康 裕 助教授 桑 原 知 子

論 文 内 容 の 要 旨

夢は、様々な心理臨床家によって、人間にとっての大切な現象として扱われてきた。夢に対しては、一方では夢内容の分類を中心とした客観的研究が行われ、他方では心理療法における夢を素材とした事例研究がなされている。それに対して本論文は、心理療法場面に限定するのではなく、むしろ誰にも現れる夢という現象を、臨床心理学的な視点から研究するという立場で書かれたものである。そのために＜かかわり＞という概念が鍵とされた。

序章では、夢との＜かかわり＞についての導入的な考察がなされた。夢は、主体からすると対象であると同時に、圧倒的な現実性を有する。そこに夢とのかかわりの重要性が生じてくる。＜かかわり＞には「パラドックス」と「双方向性」という特徴が認められる。つまり夢には違和感による差異をもとにしてかかわりが可能になり、またかかわりによって差異が生まれるというパラドックスがある。そして夢と主体との＜かかわり＞には、「主体→夢」の方向性と同時に、夢が自律的に夢見手に生じることを考えると、その逆である「夢→主体」という方向の動きも同時に起こっていると考えられる。このような夢とのかかわりを考える序論を出発点として、第一部では文献研究、第二部では調査研究が行われた。

第一部では、夢に関する心理療法家の様々な考察から、「夢との＜かかわり＞」のあり方が描き出された。歴史的に見ると、夢が夢見手の元に舞い降りて来るという観点(夢→主体)を重視していた古代に比べ、FreudとJungは夢見手が夢に＜かかわる＞という観点(主体→夢)を重視したと考えられる。FreudとJungの夢論考には、＜かかわり＞の双方向的な動きが見られるという点では共通していると考えられた。また体験派の心理臨床家の論考は、「からだ」や「ことばにならないもの」、「夢になる以前のもの」に焦点を当て、ワークすることで、意味よりも自らの夢に＜かかわる＞こと自体に重きを置いていると考察された。

第二部では、質問紙調査および面接調査を用いて「夢との＜かかわり＞」をダイナミックに描き出すことが試みられた。心理療法の立場からすると、夢を調査研究することに疑問が投げかけられるかもしれないけれども、問題は「調査」という手法自体にあるわけではなく、その焦点が主に夢の「内容」のみに向けられていることにありと考えられる。それに対して、夢内容を分類するのではなく、「夢との＜かかわり＞」というダイナミックスに焦点を当てるように努められた。

第一章では、主体から夢へという方向での＜かかわり＞の基準となる視点として「自我」という概念を取り上げて調査が行われた。主体が夢に＜かかわる＞ことは「自から他への行為」であり、「自我」とはこの「自」の中心としての性質を示していると考えられる。この＜自我＞という視点がどのように現れるのかを質問紙によって調べた。その結果、夢自我の出来事へのかかわり方には、＜自我＞という視点到固執する場合と、＜自我＞という視点を相対化する場合とが、それぞれ独立した＜かかわり＞として存在しうることが示された。さらにこの「夢の中の出来事に対する夢自我の＜かかわり＞」と、夢見手が夢という現象をどのように捉えるのかという「夢見手の＜かかわり＞」とが密接に関連していることが示された。

第二章では、より力動的に「夢との＜かかわり＞」を描き出すために、「物語」という観点について検討し、さらにはその視点を超えることが試みられた。まずは質問紙調査により、「物語的観点」に含まれる要素を明確にした。つまり「物語

的観点」には、出来事が「展開」していくことを重視する要素と、出来事の変化の中に「一貫性」を見出すことを重視する要素が見出された。このような「物語的観点」の夢という現象に対しての関係を、質問紙調査によって調べた。夢に対する「物語的観点」は全体的に低得点で、夢に対して「物語的観点」を導入しにくいことが伺えた。しかし以上のような質問紙調査のみでは「物語的観点」の「物語る」という動きのあるプロセスを捉え切れではないと思われる。そこで「具体的な一つの夢」について夢見手自身に自己分析してもらうことで、夢との＜かかわり＞についてより深く検討することを試みた。その際の手法として、PAC分析を応用した手法を用いた。夢を個々のイメージに分解し、夢見手によるイメージ間の類似度評定をそのまま用いる場合と数値を逆転させて用いる場合との二場面を設定し、比較することで「物語的観点」を超えることを試みた。その結果、類似度逆転評定場面において非常に意義深い自己分析が行われることが示唆された。そこから、「わからないもの」としての夢「物語にならないこと」について考察された。物語を超えた＜かかわり＞とは夢の内側から＜かかわる＞ことであり、それによって「夢の世界」に戻ることが可能になると考えられた。

第三章では、「夢（他）→主体（自）」という方向を含めて、＜かかわり＞の双方向性をより考慮に入れた検討がなされた。本来、夢は意図して見るものではなくて、夢の方からやってくるものである。この夢の方から主体に＜かかわる＞傾向が特に強い「恐怖夢」を取り上げることで、「自」と「他」が絡み合うような＜かかわり＞の双方向性について論じることを試みた。その手法として、恐怖夢を見る夢見手に対して、その夢について語ってもらう半構造化面接による調査を行った。その意図は、「夢→主体」という方向の＜かかわり＞の要素が強く現れている「恐怖夢」について、夢見手はどのような＜かかわり＞を持つのかを、その「語り」に注目して捉えることであった。夢見手の「語り」の事例研究的な考察によって、恐怖は出来事との＜かかわり＞に対する重要な動機であり、出来事との接点でもあることが浮かび上がった。恐怖が双方向性を持つ＜かかわり＞の土台となることが考察された。

以上のように本論文では、夢との＜かかわり＞について検討することが試みられてきた。まずは「自」としての主体が「他」としての夢にどのように＜かかわり＞を持つのかというテーマから始まり、さらには＜かかわり＞を「自」と「他」の絡み合い（双方向的運動）として考え、この双方向的運動が生じることの意義を主張するに至った。そして最後に、夢を「語る」ことと「聴く」こと、そして自他の「あいだ」についての考察が加えられた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、夢について臨床心理学的視点から研究したものである。臨床心理学の研究においては、臨床心理学的な現象を対象としつつも、その方法論のみならず、その考察や分析の視点が基礎心理学から借用されたものとどまってしまうことがしばしば見受けられる。その逆に、徹底して事例研究法という、心理療法のあり方に沿った研究法によっているものも認められる。基礎心理学の方法論に沿っていれば学術論文に値する、あるいは逆に事例研究さえ行えば臨床心理学の論文であるという考え方は問い直される必要がある。さらには学位論文においては、その両方の方法論が混在していて、いわば一貫性を欠いた折衷的な研究に終わってしまうような場合も多いように見受けられ、臨床心理学の方法論における一つの大きな課題と考えられる。

それに対して本論文は、対象を心理療法における事例に限らず、誰にも生じるものとしての夢を対象として、その意味で一般の心理学に開かれつつも、視点を臨床心理学的なものとすることで統一させ、また臨床心理学の独自性を示そうとしたのは、方法論としてすぐれていると考えられる。その臨床心理学的な視点の質が必然的に問われねばならないけれども、臨床心理学的な学位論文の一つのモデルともなりうるもので、高く評価できると言えよう。

その際に鍵となった概念が＜かかわり＞である。夢については、Freudの性理論、Jungの元型論を取り上げてみてもわかるように、個々の研究においても、夢の内容についてアプローチするものが多い。それに対して、夢への＜かかわり＞に焦点を当てた本論文の着眼点はすぐれており、夢についてのいわばより普遍化され、抽象化されたレベルでの心理学的な取り扱いが可能になったと言えよう。また「自」としての主体の「他」としての夢へのかかわり、さらには＜かかわり＞を「自」と「他」の絡み合いとして捉えていくというように、＜かかわり＞というキーワードによって、本論文の中での個別の様々な研究を見通していく統一感が生まれたように思われる。

このような内容から＜かかわり＞への視点の移動は、いわば無意識の内容に注目することから無意識への自我のかかわり

方を重視する方向にシフトした自我心理学の観点にある意味で沿っていつていると言えよう。それに相応して、第二部の第一章では、「他」である夢へのかかわりの主体としての自我に焦点が当てられる。「落ちる夢」と「逃げる夢」に対するかかわり方の調査において、夢自我の出来事へのかかわり方には、＜自我＞という視点に固執する場合と、＜自我＞という視点を相対化する場合とが、それぞれ独立した＜かかわり＞として存在しうることが示されたのは、非常に興味深い結果であり、注目に値する。つまり心理療法の立場からすると、自我というのは、強化すべきものであったり、また抵抗などに現れているときには捨てるべきものであったり、二義的なものであるもので、それに対応するものが夢との＜かかわり＞において認められたのは特筆すべきであるし、またその二つのかかわり方が単に反対のものではなくて、独立するものとして取り出されたのは、まさに自我の二義性に関係してくると思われる。

自我心理学的な視点は、自我を実体化し、固定化する問題点を持っているので、それを超えていく必要があると思われる。それに相応して、本論文では第二章で、物語という視点がもたらされる。これは＜かかわり＞をさらに動的なものとして捉えていこうとする試みである。しかしながら著者は、物語というのがやはり固定した構造を持つてしまうことを指摘して、それをさらにこわしていく動きを強調する。そのために使われた手続きが、夢を個々のイメージに断片化させて、その諸要素の類似度を評定させ、その類似度評定をそのまま用いる場合と数値を逆転させて用いる場合との二場面を設定し、比較することである。このPAC分析の応用のような手法によって、類似度が高いものによる構成が、物語的観点を超えることができなかったのに対して、類似度評定を逆転させたものでは、驚くべき洞察がしばしば被験者からもたらされたのは、心理療法の視点からして注目に値する。心理療法において夢にアプローチする際にも、夢のイメージの近さや共通性に頼っても、夢のストーリーをいわばなぞるだけにとどまるのに対して、Hillmanがストーリーでなく個々のイメージを強調するように、物語性をこわすことによって、表面に現れていないつながりや洞察がもたらされることが期待されるわけである。このように本論文は実際の心理療法を扱っていないなくても、そこでの視点や分析の結果が非常に臨床的であるところが評価できると言えよう。

夢に対する＜かかわり＞だけではなくて、夢という「他」からの＜かかわり＞を捉えるために第三章では恐怖夢を素材とした縦断的な調査がなされ、そこからさらに自他の絡み合いへと考察は進んでいく。それはまさに心理療法的なかかわりであり、本論文での視点がさらに深まっていくことが今後期待される。

本論文に関しては、たとえば因子が単に逆ではないなどの、せっかくの興味深い調査結果が出ていながら、それに対する考察がやや不足している、文献研究に偏りが見られ、たとえば現存在分析が取り上げられていない、＜かかわり＞という形式面を扱っているが、それと夢の内容は切り離せないのではないか、などという指摘もなされた。しかしながら全体としては、臨床心理学的視点ということから、夢との＜かかわり＞に焦点を当てて、一貫した調査、研究を行った本論文は高く評価できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成16年6月10日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。